

手話 = 言語

酒井邦嘉・東京大助教の研究チームは十二日までに、手話を理解する際に左脳の「言語野」と呼ばれる部分が活性化することを、磁気共鳴画像装置(MRI)を使った実験で世界で初めて突き止めた。通常の声による会話と同じ脳の部位が働いていることが明らかになり、手話が単なる身ぶり手ぶりとはいずれ、高度な脳機能による「言語」だと証明された。

脳の同じ部分が活動

長い間、手話は「不完全な表現方法」と見られてきたため、多くのろう学校では読唇術や発声の訓練が中心で、手話は禁止されたり補助的な役割にとどまったりしていた。しかし酒井助教は今回の研究結果から「手

話」は長い歴史があり、日本語とは異なる独自の

東大チームが確認

「教育に活用を」

手話や日本語の会話をビデオや音声で視聴した際に、脳のどの部分が活性化するかMRIで調べた。その結果、聞こえる人が音声による会話を理解するときに活性化する部分と、耳の聞こえない人が手話を理解する際に活性化する部分は完全に一致した。

あることがはっきりした」としている。事故で左脳を損傷して手話が使えなくなった例などから、手話と左脳との関連は推測されてきたが、実験で確認されたのは初めて。

ジェスチャーやパントマイムでは右脳、左脳の区別無く活性化することが知られており、酒井助教は「日本手話が身ぶり手ぶりとは全く異質で

酒井助教教授は「これまで手話の重要性が認識されていなかったため、耳の聞こえない人は不完全な音声言語で教育を受けざるをえず、極めて不利な状況にあった。一日も早い行政の対応が必要」と指摘している。

文法を持つことが知られている。

酒井助教教授は、耳の聞こえない人、聞こえる人計三十三人を調査。日本

手話」は長い歴史があり、日本語とは異なる独自の

酒井助教教授は「これまで手話の重要性が認識されていなかったため、耳の聞こえない人は不完全な音声言語で教育を受けざるをえず、極めて不利な状況にあった。一日も早い行政の対応が必要」と指摘している。